

知恵の樹

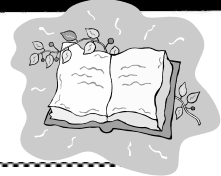
No. 134 2008. 11. 19

町田の図書館活動を
すすめる会

事務局: 町田市森野 3-1-12 増山方
〒194-0022 FAX 042-722-1243

図書館とアニメーション

辻 由 美



ここ数年来、日本でも読書へのいざないの活動として、「アニメーション」が注目されてきた。私は仕事の関係上、渡仏のたびに図書館を利用しているので、フランスの図書館におけるアニメーションの例を少しばかり紹介してみたい。

日本では、アニメーションは、どちらかといえば教育現場で実践が試みられているようだが、フランスでは、アニメーションという言葉がきわめてよく使われているのは、どちらかと言えば公共図書館である。

図書館におけるアニメーションとは、「資料に生をあたえる」活動のことだ。つまり、図書館に資料を並べておくだけではなく、これらの資料が、利用者によりよく活用されるように、図書館が利用者に対して積極的な働きかけをおこなうことである。言い換えれば、図書館の存在と有用性のアピールのようなものだ。

フランスの図書館におけるアニメーションは、1924年、パリにはじめての子ども図書館「楽しいひととき」が設立された時に端を発する。利用者が子どもの場合、図書館に足をはこばせ、本に対する興味をかきたてる活動が必要不可欠となるからだ。こうして、図書館のアニメーションは、語り、読み聞かせ、言葉あそび、ディベート、作家との出会いなどなど、多種多様なかたちをとって発展していった。

現在では、アニメーションは、子どもだけではなく大人の利用者をも対象とする活動である。公共図書館のアニメーションの重要性は、その図書館が設置

されている地域の事情によって異なってくる。一般的に言えば、貧困層や移民が多い地域ほど、アニメーションは欠かせないものとなる。図書館利用を文化的に疎外されがちな社会層にもひろげ、文章が読めない人を無くするというのが、アニメーションが担う役割のひとつだからだ。

パリ18区のグット・ドール(黄金のしずく)図書館のケースをあげよう。パリ18区は移民たちの街で、この街を歩いていると、どこの国にいるのか分からなくなるほど、いろいろな出身の人々が混在している。社会生活や職業生活の上で障害になるほどの読書力不足は、大きな社会問題のひとつである。もともと学校教育をほとんど受けていない人たちもいれば、学校教育は受けたが、その後、読む習慣を失ってしまった人たちもいる。学校の勉強に困難をかかえる子どもたちも多い。

この地域には、そういう人たちを支援するためのNPOが幾つも存在するが、図書館はそうしたNPOとパートナーシップを組んで、アニメーションをおこなっている。NPOのメンバーには、ソーシャルワーカーもいれば、ボランティアもいる。

読書へのいざないは、子どもも大人も参加できるものでなければならず、その一つとして考えられたアニメーションが、「図書館でゲームをしよう!」である。サイコロを使うなど、どんな年齢でも参加できるので、対象は7歳から77歳までのインタージェネレーション。1カ月に2回ほど、誰もが参加できるように、

土曜日の午後におこなわれる。そのゲームの多くは、アラブ圏やアフリカ由来のものだが、他の出身の人たちを集めることにも成功している。ゲームが、異なった世代、異なった民族の架け橋となっているのだ。

図書館にとって大切なことは、そこでおこなわれるゲームに関する本や解説書をかならず用意して、テーブルに並べておくことだ。自分がそれまであまり知らなかったゲームに参加した人たちは、かならずそうした本に興味を抱き、テーブルに並べられた本は、すぐに借りられてゆくという。

ゲームが文章を読むモチベーションとなり、図書館利用のきっかけをつくるのである。ゲームのレパトリーを広げるには、地域の住民、とくに高齢者と接触が必要で、そのためにもNPOとの協力が欠かせない。図書館はいつもゲームに関する本の収集のためのアンテナを張っている。

出身国の相違をこえ、世代を超えるアニメーションというのが、この図書館の基本方針である。このため、読み聞かせをおこなうときも、子ども用の本だけでなく、かならず大人用の本をも準備する。読み聞かせは、読書意欲が刺激されるような個所を選んでおこなわれるため、そこで朗読された本は、かならず借りられてゆくという。

もうひとつ、グット・ドール図書館がおこなっている大切なアニメーションは、地域探索と読書を結び付けることだ。その手段として、たとえば、その界限を舞台とするミステリものをとりあげる。小説に描かれた事件の起こった場所や、犯人の逃走経路などを実際にたどって歩くことは、作品を理解する助けになり、

読書を容易にする。パリ18区は古い通りをかなりよく保存している街なので、一步奥に入ると、細い道が交錯する場所などもあり、たしかにミステリの空想を膨らませるのに向いている。

この地域には、有名な作家の名にちなんだ通りが幾つかあり、これもアニメーションの材料になる。

たとえば、エミール・ゾラ通り。外国出身者の多いこの街では、エミール・ゾラが、19世紀フランスの大作家であることは、あまり知られていない。そこで、図書館はエミール・ゾラ通りを探索し、その小説の主人公ナナが住んだと考えられている場所などを訪問するという企画をたてる。この場合も大切なことは、この企画の期間中、ゾラの作品をまとめて図書館に展示しておくことだ。きわめて効果のあがるアニメーションで、参加した人たちは、たちまちゾラの作品に興味をもち、本を借りてゆくという。

それ以外にも、読書クラブやディベート、料理の本をめぐっておこなうイベントなど、まだ実行には移していないが計画中のアニメーションが幾つもある。

「こうした地域にある図書館は、アニメーションなしには、生きてゆけません。私たちの職業は司書ですが、司書である以上に、アニメーターであろうと努めています」

館長のマリ＝ロール・ジェスティオンさんはそう語った。アニメーションをどうおこなうかは、その地域に住んでいる人たちによって異なるので、どこにでも通用する絶対的な処方箋は存在しない。アニメーションは、司書たちの想像力や独創性をもっとも発揮される領域なのである。（翻訳家・作家/会員）

「常世田氏講演会 Part 2 知っていますか？ 図書館でできること

—図書館でできることとそのあり方—」に参加して

柿の木文庫 鈴木真佐世

私は、昨年8月から、鶴川駅前公共施設建設のための市民ワークショップに参加しており、特に図書館部会のメンバーとして、これからの図書館はどうあったらいいかを自分なりに考えられるように、図書館に関する講演会やほかの市の図書館を見学に積極

的に出かけています。今回は、立川女性総合センターで11月9日に行われた常世田良氏(日本図書館協会理事)の表記講演会(2部は指定管理の図書館で働く方の話)を伺う目的と同じ建物にある立川市立図書館の見学を兼ねて行きました。以下、心に留

まったことを報告いたします。

<1部の常世田さんのお話の報告は、5月17日に行った立川 part1の常世田氏の講演(当会報 130号参照)と重なる部分が多いため、筆者了承の上割愛させていただきました(編)>

2部では、O区の指定管理制度の図書館で働く方から、現場の生々しい話を伺いました。

話を下さったのは、O区の図書館の非常勤を5年続けた後、首を切られたので他区の非常勤として働き、O区が委託制度から指定管理者制度になったのに伴い、指定管理者側で働き出して1年半の経験を持つ方でした。

O区は、2007年4月から中央館は窓口のみ、地域館は16館すべて指定管理者制度。17ある区立図書館に指定管理者8社が入っていて、それぞれ相談し合うことはなく別々に管理運営されている。

◎非常勤・委託・指定管理—非正規雇用図書館員の労働条件

・非常勤:区の職員だが1年度単位の雇用で更新を繰り返すが、更新回数に制限が設けられている場合もあり、不安定な立場。収入は月に12万から20万程度で昇給はない。

・委託スタッフ・指定管理スタッフ:非常勤よりも条件が悪い。委託スタッフ(パートタイム)は時給800~950円程度、現場の責任者である委託チーフおよびサブチーフ(フルタイム)は月給で18~20万円程度。区との委託契約が年度末までのため、雇用契約も年度末までで不安定、昇給は基本的にない。

◎仕事の内容

非常勤:普通、補助的な仕事だが、司書資格のある者が専門的な仕事を任されている区もある。

委託:基幹的業務を区職員、定型的業務を委託スタッフが受け持つ。

指定管理:委託になじまないとされてきた基幹的業務も指定管理者に任される。

指定管理者になって一番大変なのは、選書。すべての仕事にはマニュアルがあり、それに合わせて

業務をする。選書もそのひとつで、毎月同額分の選書をマニュアルに沿って行い、中央館の区職員で構成される選書スタッフに出さなくてはならない。(最終選書は区職員によってなされる。)1年半でだいぶ慣れたが、こんな自分たちが選書をしていいのかとも思ってしまう。

◎委託後の図書館の状況(主に23区。23区は殆どが委託方式か指定管理者制度)

・窓口委託開始時の混乱

(業務の分断、区と委託との引き継ぎ)

・利用者アンケートではおおむね良好

(開館時間拡大、窓口対応ソフトになったなど)

◎問題点

・低賃金、不安定雇用のためスタッフの定着率が低い(5年の間に2人を除いて全員入れ替わっている)

・スキルアップのための研修体制の不備(区は指定管理者任せ。指定管理者にはその余裕がない)

・安定的、継続的な図書館運営ができるのか(委託は1年、指定管理は3年契約)

図書館長は管理職経験者になるので、図書館の事を知らない人が多い。

◎今後の取り組みとして、図書館スタッフ交流会をやりたい。

以上がお二人の話でした。

日本では図書館法はあっても、国は財政的にも運用面でもきちんと関わらないために、地方自治体次第という常世田さんの最初の話を聞き、私は、フィンランドの図書館政策とのあまりの違いを感じてしまいました。今読み進めている『学力世界一を支えるフィンランドの図書館』(西川馨編著)によれば、フィンランドでは、「情報源と文化に対して、国民の誰もが平等にアクセスできる仕組みを保障する」ために、国は、改正図書館法で

・国民の図書館利用に対する機会の平等化を促進すること

・公共図書館は地方自治体が運営し、自治体自らの責任でサービス内容を決定できること

- ・利用の無料制
- ・国は自治体の図書館を人口比に応じて財政支援する責任を負うこと（下線筆者）
- ・インターネットによる双方向のネットワークサービス、国内、国際的なネットワークの構築。

図書館令では、

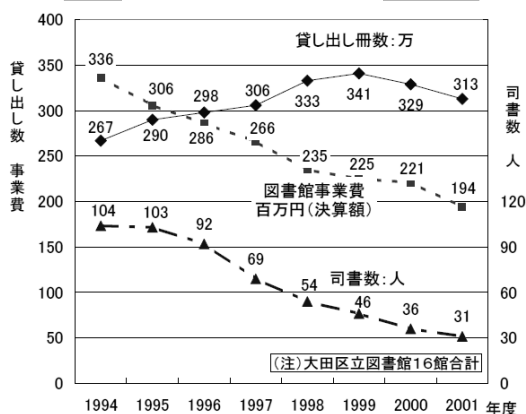
- ・図書館利用の無料の原則
- ・いつでも知りたい情報について専門職員にアクセスできること
- ・図書館資料・設備を常に更新すべきこと
- ・十分な数の専門職員を配置すること
- ・図書館職員の資格要件のこと
- ・常にサービスの評価をすべき事

など図書館のあるべき姿の維持、向上のための要件を盛り込み、実際の財政支出も、図書館経費にかかる総支出の 42% (国民一人あたり 46 ユーロ = 7360 円) を国が補助しているということです。さらに、将来に向けても、図書館戦略、図書館発展計画など、次々と打ち出されています。図書館に対する国の取り組みが全然違うことがあらためてわかりました。

また、O 区の図書館については、講演後の質疑応答の時に、常世田さんから、昭和 30,40 年代はとても素晴らしい図書館であったが、その後一般の職員と同じ異動にしてしまったので、優秀な図書館員がばらばらになり、レベルダウンしてしまったというこ

ともうかがいました。

O 区図書館



激減する事業費(資料購入費など)と司書

O 区の図書館のことが気になり、ネットで情報を検索しましたら、1994 年から 2001 年のちょっと古い実情のグラフを見つけました。8 年間で貸出冊数は増えていますが、図書館事業費は半額近くに、司書の数は 3分の1以下に下降しています。さらに、2007 年からは指定管理者制度になり、長期的な展望が持てない図書館になっている現状に、区民はどう感じているのでしょうか。

いろいろ考えさせられる講演会でした。町田で指定管理者制度の風が吹かないように市民も目を光らせていなくてはならないと思いました。

脇明子氏講演会から 「読書によって生きる力を育てる」とは・・・

— 実体験と同じ効果のある「質のいい物語」を、まず声で —

去る 11 月 9 日(日)午後、「物語が生きる力を育てる」<講師:脇明子氏(ノートルダム清心女子大学教授・岡山子ども本の会代表・岡山県子ども読書活動推進会議会長)>と題した講演会がありました。遠くからの参加者もあり 150 席の「エポックなかはら・大会議室」はほぼ満席。これは川崎の「生きた学校図書館めぐす会」が主催して行ったものですが、その 2 日前には都立多摩図書館が同じような演題で脇氏の講演会を行っており、いまや氏は全国あちこちで講師として招かれ、ご自身の著書『読む力は生きる力』『物語が生きる力を育てる』(共に岩波書店)を演題にその理論と実践を説いて回っておられます。一度は聴いてみたいと思いつけてみました。(増山)

冒頭、「子どもの読書活動の推進に関する法律」は、読み聞かせグループやお話ボランティアを増やし読書活動の推進が活発化したように思われる

が、実態は良くなく、迷走し氾濫を起しているようであると、ボランティア問題、多読・速読を良しとした朝読の時間などについて触れられた。

子どもの反応がいいからと、物語そのものよりも視覚を重視したもの(パネルシアター・ペープサート・指人形 etc...)が多く、もの作りの楽しさを追い求めているボランティアがいる。それらに加えて紙芝居とか大型絵本とかがスペースを占めているが、そんなに絵を見せなければならぬのか、スクリーンに絵を映して読み聞かせをしたりするが、そんなに大勢で見なくてはならないものなのか…。そうした実態はおかしいと思いつつ、先生方はそれをお母さんたちに言えないで悩んでおられるとか。

また、多読・速読を重視するあまり、小学生は質の悪い読み物で数を稼ぐような読書をしており、そうした読書の内実は、本を読めない子どもに育っている場合が多く中学生で断ち切れてしまう、と教え子を例に話された。出版社も、手に取られやすいものをということから、質よりも受けを狙った本を出すなど、質を低下させ、それが読書力を低下させるという悪循環に繋がっている、とも。

子どもが本を読むのは何故必要なのか

今、インターネットで何でも調べられ本を読む必要性がない、楽しさから言えばゲームや映画などビジュアルなものもたくさんある。能力のことを言うけれど、全員が下がってきたらそれも問題ないからそういったことは通用しない。想像力が大事、といってもそれは贅沢な趣味に感じる…。それゆえ一昔前まで学生にどう言えば本を読む必要性を分かってもらえるかで悩んでおられたとのこと。

読書をしなくても、昔の人の生きる力はすごかった。無文字社会では、言葉を使い民族の知識や物語を伝えていたとして『語りつぐ人々』(アフリカ)を紹介。文字が無いゆえに記憶力が発達し、ものすごい情報をインプットして活用、加えて昔話、わらべうた、唱え言葉をたくさん知っていたのだ、と。

日常会話とは違う—わらべうたやお話—による言葉のスキンシップの喜びは、自尊心の基礎になる。わらべ歌は、内容がどうであるか以前に自分に与えてもらっているという言葉のご馳走。筋の通ったお話(繰り返す・帰ってくる・問題解決)は、想像して喜ぶ力を発揮する。特に昔話は話として楽しむだけでなく、重要な決断を下す際の助けとなる。

本を読まなくても、日常の生活体験と、民族の知

恵が織り込まれた物語を聞くことで、生きる力を身につけることが出来たのである。真の意味で、生きる力が育つのは、世代間を越えた多数の人との質の良い実体験と豊かな自然体験にある。現在は、人間の育ちの中で豊かな実体験が乏しいゆえに、読書の必要性があるのだ、と言われる。

確かに、文明が発達するにつれて人間は感じる力を失っていった。私がそれを感じたのは、20年近く前にラオスを旅したときである。デコボコだらけの道や危険なところに柵をしていない場所ばかりで、五感を働かせて歩かないと怪我をしてしまう。子どもたちは全身を耳にして音を聞き取り、においを嗅ぎ裸足で走り回っていた。ラオスよりも少し文明が発達したバンコク(タイ)に立寄ると、子どものおもちゃそのものも、自然を材料に手作りをしたラオスのものと違って、プラスチックのものが多く見られ、日本にいたると、精密機械で作られた精細なおもちゃとなり、それに比例するように、子どもの表情が能面化していくように感じたことを記憶している。文明が発達すると、個人の責任よりも、危険な箇所を整備していなかった社会・他人に責任が問われるようになり、便利さを追求していくあまり人間の感覚器官はますます衰えていくのだろう。

氏は、人工的環境は便利で余分なことを考えなくて済むとして、新幹線での旅行と田んぼのあぜ道を歩く労力の差を例えられ、五感を全部使って様々な能力を身につけて育つ、それが子ども時代にあるかどうかで、生きる力は違ってくるのだと言われる。

しかし現代は、五感を必要としない人工的環境の中にいて、その上メディアの発達によりメディア依存症が増えている。これは直接的にも間接的にも子どもの発達を脅かし、実体験に追いつけをけている、と参考資料としてあげられた「メディア社会が子どもの発達を脅かしている」〔日本小児科医学会『子どもとメディア』の問題に関する提言〕(日本小児科学会、日本小児保健協議会からも同様の趣旨の提言)〕について説明をされた。

間接的状況とは、電子メディア、映像など、直接危険・刺激がなくても、メディア接している間他人や自然との関わりがないということで、直接的より

もダメージが大きいという。こういった状況の中で、生きる力を育てるには、質の良い物語、生きる力が育った人たちの体験を、子どもたちに与えること、が大事というのである。

まず耳から質の良い読書を

生きる力を育むことが出来ない社会、この状態から子どもたちを救い出すには、今の社会生活を丸ごと変え、昔の社会を取り戻すことだが、それは出来ない。その代替として簡単で効果があるのは、質の良い物語を子どもたちに与えること。今の子は読まないというが、生活を丸ごと変えることを考えると、はるかに簡単である。

大事なことは、質の良い読書であるということ。耳からの読書も勿論含まれる。小学生位までの読書は、自分で読むより読んでもらう方が何倍も効果的。良い中身の物語を耳から届ける。それは実体験の不足を補う力がある。メディア依存を防ぐ自分の力ともなる。メディアが子どもたちを脅かしている時代だからこそ、読書は大事なのである。テレビなどとは違って人間関係の体験となる読書は、内容によっては実体験を促しその質を高めるのである。しかしどんなものでも良いということではなく、氏は繰り返し「質の大事さ」について力説された。

今の子どもたちの読書状況は、「質のいい」ものが少ない。人気がある、反応が良いと評価される絵本にも「質の悪いもの」が多いとして、
・視点が曖昧で感情移入できないもの(それでいて泣けるものがある)／・おろかな失敗を見下しておもしろがるもの／・とっぴな展開や細部の描きこみをたのしむもの／・単に繰り返しなどのパターンをなぞっただけのもの／・「遊園地的世界観」でしかない「かわいさ」や「きれいさ」、を問題点として指摘し、いいものと悪いものの対比として 12 組挙げられた絵本の内 3 組について一出てくるものが突飛、単なる繰り返し、生きた世界とのつながりが無い、内容と写真、絵などがあっていない一等、具体的に説明された。

質の良い読書へのサポートには、物語の本に進んでもしっかりと読み聞かせを続けるのが一番である、といわれる。主人公の感じたことを感じるという感情移入は、五感につながるパスポートとなり、自分

がその場にいるように周りの人たちの言葉を聞き感じとる。しかし、大げさな読み方・語り方は、聞き手が観客になってしまうから、要注意。

また、感情移入には時間がかかるため、短い作品では難しい。短い方が読みやすいというのは大きな誤解で長さを恐れず長編に進むこととして、長編を読み聞かせてもらうことのメリットを挙げられた。
・いいものに触れることが出来る／・敷居が越えられる／・受取り方が分かる／・速読では出来ないじっくり想像し丸ごと楽しむことが出来る／・子ども同士でのいい話題となる。

読み聞かせで成功した本として、『世界の始まり』(メイヨー)／『ロシアの昔話』(内田りさこ)／『けんた・うさぎ』(中川梨枝子)／『チムと勇敢な船長さんーシリーズ』(アーディゾーニ)／『ちびっこカムのぼうけん』(神沢利子)／『ふたりのロッセ』(ケストナー)／『狼森と策森、盗森』『セロ弾きのゴーシュ』(宮沢賢治)／『冒険者たち』(斉藤敦夫)、などがレジュメに書かれていた。

しかし、ボランティアの読み聞かせや語りだけでは読書につながっていかないと、担任の先生がじっくり読んでやることを勧める。

質のいい本を読ませるには、5 分くらいで読めるところをまず探し(選ぶのはベストな箇所ではなくセカンドベストを)、読めるのに必要なところを織り込めながら自分が面白く想像力が働き出すところを紹介する。また、自分の蔵書を増やしていくように、と結ばれた。

資料の中には、シートン、マーヒー、カニグズバーク、リス、サトウフ、パーネットなどの、もう 30 歳半ばの息子が子どもの時に親子読書会で一緒に読んだ本がリストアップされていたが、今の子どもに読んでもらうには至難の業だろう。子どもの目を惹こうと、表紙もあでやかにかわいい挿絵を入れて、名作が復刻版として出されているが、活字の多さを見ただけで書棚に戻してしまい読書に結びつかない現実がある。氏が言うように、学校で担任が読み聞かせてくれることを願うが、現教育現場を知る者として、よほどの決意がないと出来ないことと察する。

現在活動しているボランティアの質を改善し、楽しい意義ある物語の世界を少しでも多くの子どもたちに、少しでも多く触れる機会をもてたらと願う。



元？ライトノベル作家 大いに語る

11月12日(水) 午後3時半から町田市立南中にて

主催：町田中教研図書館部会

今回の中教研では、南中のK先生が呑み友達というよしみで、ライトノベルや一般書で人気の若手作家 橋本紘氏をお招きしての会となった。橋本氏は10年ほど前にライトノベルの登竜門でもある電撃文庫大賞を『猫目狩り』で受賞、その後『リバーズエンド』『半分の月がのぼる空』などで中高生を中心に人気を博し、現在はライトノベルをやめて一般文芸書を数多く発表している注目の若手作家の一人。私のいる学校図書館でも上記の作品などはいまだに男女とも人気で、よく「次はいつ出るの？」と聞かれて困る。また学図研便りに学校図書館を舞台にした連載小説を執筆したりなど(現在は中断中)、学校図書館にも熱い想いを寄せている。今回は先ず南中の生徒との懇談があり、その後中教研の先生方との懇談となり、図書指導員も6人ほど参加させていただいた。

橋本氏は古典から現代物までたくさんの本を読んでいて、子どもの頃は学校図書館がとても大好きな場所だったという。ただ当時は図書館というと校舎の端っこにあって、十分な本が揃っているわけでもなく、どことなく暗いイメージがあった。ところが2・3年前に蒲田のある高校図書館に呼ばれていって、充実した品揃えと明るい雰囲気には驚かれたそうだ。その時に渡された図書館便りを読んで、そうだ、ここに僕の小

説も連載してもらおうと思い立ち、学校図書館を舞台の連載小説が始まったのだという。ただ自分の中にある学校図書館と、現実でそこ働いている人達との想いや現在進行中の学校図書館との間にギャップがあり、なかなかリアルなものが書けずに苦労しているとのこと。中断しているのはなんとも残念ではあるが。

話の後半は、どちらかというと出版不況・文芸書不振に集中した。また出版社がメディアミックスとして特定の作品を大金を投じて売り出す手法に対する疑問なども述べていた。私も常々、作家や作品があたかも消耗品のごとく扱われる昨今の日本の状況には、とても疑問を感じている。ごく少数の力のある作家だけに、何年もかけて書き下ろし作品を世に問うという贅沢？が許され、他の作家達はまるで馬にでも喰わせるように！次から次へと作品を粗製乱造(失礼)しなければ、出版社から忘れ去られてしまうような、こんなにも作家と作品を大切にしない状況で、10年後にも人々の心に残る作品など生れるのだろうか。またやたらとマンガ・映像化されるのも、結局は放送や映画業界にオリジナルを作れる人が育っていないからだけではないのかと感じてしまう。

ともあれ、橋本氏はこれからも自分の私生活を大切にしながら(このあたりの話はとてもナイーブさを感じた)、創作にも力を注いでいくとのこと。ぜひ頑張っていたきたい。(水越)

町田の学校図書館を考える会 11月定例会／8日(土)10:30～12:15 公民館6階フリースペースにて

出席者：清水・伴・谷釜・市川

①「町田市立小中学校の充実を求める要望書」について→会員に要望事項等を諮り、代表が作成。

②小山田中学校の見学について→11月26日(水)11時～(学校正門前に10:50集合)

町田バスセンター(町32系統、町34系統)3番のりば(10:12発)「小山田桜台」行き「桜台入り口」下車 徒歩3分／希望者は事前に代表(伴 ☎&Fax 042-797-9579)迄

③講演会について

次回定例会・・・12/13(土)10:30～公民館6階フリースペース

*今回の定例会に、和田恵理子さん(元、山崎小学校図書指導員、現、明治大学図書館司書)が、参加していただき、貴重なご意見を頂きました。ありがとうございました。

皆さんの参加をお待ちしております。

(報告：市川)



ひろば

<10月例会報告> 15日
(水) 16:30~会報印刷
18:00~20:30 例会
於・中央図書館中集會室

出席/伊藤 片岡 小林 斎川 島尻 辻
手嶋 前島 増山 桃澤 守谷 山口洋

- 横浜の図書館の現状・・・指定管理者制度について横浜に新しい動きがある。1館制度導入の方向に進んでいる。市民運動を応援したい。
- 町田市民病院図書館のその後について。
- 浪江虔氏の書簡集・・・入力作業はほぼ終り、手嶋の許に集約。年度内には刊行したいもの。
- 鶴川駅前公共施設(新鶴川駅前図書館)建設の進捗状況・・・市民ワークショップの形をとって、音楽ホール(300席)・図書館・コミュニティ部門(郵便局、夜間救急、エカサイルーム、託児施設、子育て広場、会議室、NPOフォーラム等)いろいろなアイデアが出ているが・・・)の3部門で話し合いが進められている。

●11/13(木)19時より町田図書館嘱託員労働組合第2回定期大会が、中央図書館6階ホールにて開催されました。昨年は結成大会でしたので、初めての定期大会ということになります。PTA総会や自治会総会と数多総会がありますが、出席者は新旧役員と関係者のみという光景もよく見かけます。今回の定期大会にどれだけの組合員が出席してくれるか心配でしたが、お忙しい中いらして下さった来賓の方々に加え、組合員64名中53名の出席者がありました。小さなお子さんがいる方も妊婦さんも、やりくりをして参加してくれたことがとても嬉しく、反面関心の高さに身が引き締まる思いでした。議案は全て承認され、予定時間を10分程過ぎての閉会となりました。

来賓の方々からは、色々な場での野角委員長挨拶がすばらしいことや、嘱託員の目がいつも生き活きと輝いていることなどのお褒めの言葉を頂きました。議案集も一年間活動してきた成果を資料添付できた分、昨年よりも少しだけ厚くなりました。色々な方々に支えられながら手探りで歩んだ1年でしたが、おぼつかない足どりながらも、2年目のスタートをきることができました。その歩みは議案集の厚みが増えるのと同じように僅かなものかもしれませんが、私達の活動が延いては図書館を守ることにも繋がると信じて進んでいきたいと思っております。今後とも宜しくお願いいたします。(斎川)

2008年度 第8回 文学館(主催)で楽しむ

おとなのためのおはなし会

12月17日(木)10:30~11:30
町田市民文学館 2F大会議室



プログラム

町田の作家「桜田常久」の作品から 平田
「マッチ売りの少女」(アンデルセン) 市川
「スミの葉にもきずつく娘よ」(トルコの昔話) 杉野
「だれが鐘をならしたか」(ホルデン作) 西村
<語り:まちだ語り手の会>直接会場へどうぞ!

それぞれの機能がクワッソしていることもあって、なかなか厳しい状況である。大学のある町、学生が多い町鶴川なので、図書館に若い世代をとりこめるようにしたい/本だけではなく情報検索機能を充実させる、また、鶴川に浪江先生のコーナーを移したい等、様々な意見がでた/11/6(木)、28(金)の2日間19:00より中央図書館ホールで「コミュニティと図書館の合同部会」がある。

- すすめる会のリーフレットを作成するために始動。12月例会17日(水)

お知らせ

★第13回学校図書館のつどい~生きた学校図書館をめざして~/12/6(土)10:00~16:00 刈比ヶ谷記念青少年センター・センター棟会議室/午前「図書が支える学カーフインランドの教育から」福田誠治(都留文科大学文学部比較文化学科教授)、午後【実践報告】三島市元司書教諭&学校図書館司書/1,000円/申込:日本子どもの本研 Fax03-3992-0362,親子読書地域文庫全国連絡会 03-3488-0362(市川)

★ブックトークと語り&交流会/12/14(日)13:00~16:30/講師:田沼恵美子さん、山田範子さん/平山季重ふれあい館・平山交流センター3F小ホール(京王線平山城址公園駅歩1分)200円/直接会場へ/主催:多摩地区小中学校図書館職員の会/参加される方、図書日よりなど大歓迎!40部程持参下さい。問合せ:水越 machidagakuto@gmail.com

★小・中学校の図書館に関心ある人たちの神奈川学校図書館大交流会2008/09/17(土)13:30~16:30/ひらつか市民活動センターAB会議室/
①「学校図書館をどうつくるか~行政+市民+学校司書とともに~」報告:平塚市中学校区子ども読書活動推進協議会より ②各地の情報交換/500円/実行委員会問い:村島 045-303-5096

あとがき

秋の文化祭は全校生徒がその地の方言で昔話を語るという山形の小学校を訪問した。生徒数20名、どの子も輝いて見えた。次号に報告予定(M4)